

平成 29 年度 「きのさき見て歩き」 第2回 開催しました

9月15日(金)、平成29年度 「きのさき見て歩き」第2回～城崎・円山川の古代～を開催しました。

コース 城崎庁舎 → 城崎温泉駅(JR) → 玄武洞駅 → ケゴヤ古墳 → 青山神社
→ 二見谷古墳群 → 二見天満宮→玄武洞駅(JR) → 城崎温泉駅 → 城崎庁舎
講 師 坂田 文一郎氏 (城崎文化協会会長)
参加者 11名



<ケゴヤ古墳>



道を隔てて「ケゴヤ古墳」の墳丘を見ながら講師の説明を聞く

<青山神社>



青山神社は、もと青山谷にあった堂が明応2年(1498年)に現地に移されたもの。

本殿右に3メートル半ほどの石碑、分野(くばりもち)の神の碑がある。神々の時代、このあたりは、濁水が氾濫し、人の住める状況でなかった。そこで磐析(いわしゃく)・嶺析(ねしゃく)の二柱の神は戸島と二見の間を切り開き、濁水を日本海に流出させ、黄沼前(きぬさき)の平野を拓いたという。この石碑にはそのことを祝う歌が刻されている。

(石碑の建立は大正2年と側面に刻されている)

<二見谷古墳群>

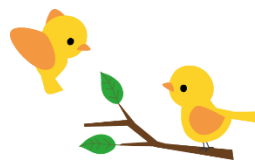


北但馬を代表する規模の石室を有する古墳。朝鮮半島の影響を受け横穴式の石室になっている。

後期古墳時代のもので、横穴式石室は原則として追葬を想定して作られており、まだ白骨化していない遺体のある墓の扉を開けて追葬が行われることから、「古事記」「日本書紀」に書かれている黄泉の国訪問の神話が生まれたと考えられるようだ。

これらの古墳群があることから、円山川河口が当時の政権にとって重要な位置であったことがうかがわれる。

<昼食・学習風景>



二見山古墳群を下り、「いまいファーム」さんのご厚意で場所をお借りして昼食。

昼食後、古墳群についてテキストを読み合って学習の時間をとる。

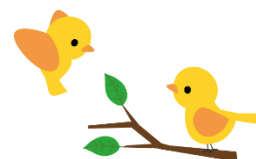
内川地区の方々が、野菜作りに力をいれておられ、今年から毎週土、日曜日に城崎温泉駅前で朝市を開いておられるなど、若い世代が地域おこしに頑張っておられる姿に元気をもらおう。

<無限水・二見天満宮>



二見の町内会長 岩本安利さんに、無限水、天満宮のお話を聞く。

二見には滾々と清水が湧き出る水源があり、ここから年間50万トンの水が豊岡の市街地の一部と城崎に供給されているとのこと。「無限水」の名前は、江戸時代、柴野栗山によって「玄武岩」とともに名づけられたもの。



イラスト協力 WANPUG

二見天満宮のご祭神は菅原道真公。昔灘の洪水が起きたとき一日市に流れ着いた祠を神意によって二见到鎮祭されることになったという。地区では「ふるみやさん」と呼ばれている。秋祭りと元旦には祝詞があげられる。

境内には水源地からパイプで水を引き、その恵みを感謝して祀られている。その右奥には石碑があり、京都上賀茂神社の神宮が1835年にこの地を訪れ、平安時代の歌人藤原兼輔を偲んで詠んだ和歌が刻まれている。藤原兼輔は、城崎を目の前にして、この地で泊ったが、当時は円山川沿いの道はなく、城崎に行くには二見からさらに山を越えていかなければならなかったという。